

一昨年、ポーランドのワルシャワ大学や在ポーランド日本大使館で、かな書道ワークショップを行った。これに続いて昨年 12 月にアメリカニューヨークで展覧会とワークショップを開催した。かな書道を世界無形遺産に登録する運動の一環として実施してきている。私の高校の同級生であり、日展で 33 回も連続入選を果たしている日本でも著名なかな書道家である襟立玉英さんが喜寿を迎えるにあたり、記念の展覧会を開催したいと考えていたので、今回は世界の芸術が集結するニューヨークの日本人クラブで実施することにした。私が主催している書道塾・墨乃会が協力することになった。日本人クラブはマンハッタンにある、1905 年に創設されたクラブで、ニューヨークの日本人の活動や親睦の会として確固とした地位を築いている。

昨年の 12 月 4 日に日本を出発し 5 日から 3 日間の展覧会である。かな書道は墨の濃淡や綿密に空間を考えられた字の組み合わせで、芸術的に昇華させて観ていても美しい。今回の展覧会は「黒と白の世界」と題して、襟立玉英さんのかな書道に加えて、アメリカ人の写真家フライアン・モア氏の白黒写真作品との共同展覧会とした。彼は墨乃会の会員の娘婿でもあり、案内葉書やポスターの制作、ニューヨークでの告知を引き受けてくれた。フライアン氏の作品の主題はストリート・フォトグラフィーで、日常生活の場面をありのまま、何の編集もしないで写すということにあり、日本の風景を白黒の写真に撮って展示した。展示品は襟立玉英さんの作品 15 点とフライアン氏の写真 10 点と二人の共同作品 2 点である。共同作品の一つは大阪城の写真を和紙に印刷し、日本の歴史を物語る大阪城に雲のようにかな書が浮かび上がる作品であり、もう一つは巫女さんの写真をやはり和紙に印刷し、令和の出典になった万葉集の言葉をかな書で入れたものになっている。

会場ではポーランドで実施したように来場者を対象にかな書道のワークショップも開催した。ワークショップでは襟立さんと彼女の同行した弟子たちが個別指導し、アメリカのカレンダーを印刷した用紙に書を張って作品に仕上げた。およそ 20 人が参加してくれ、帰国後もメールのやり取りをする関係が続いている。

またポーランドではワルシャワ大学で日本語学科の学生に講義を行ってきたので、ニューヨークでも学校で講義を行おうと計画した。幸い国際国連学校での講義の申請が認められた。講義は同行者の中の書道家、福光敬祥さんが担当した。

展示最終日に、会場で襟立さんとフライアン氏と私でギャラリートークを行った。通訳は同行者でブルガリアからの日本国費留学生の Kalin 氏が担当した。襟立さんとフライアン氏から展覧会を企画した経緯を聞いた後で私は二人に質問を投げた。会場に二人が同じ用紙で作上げた作品が二点あったからである。前日に私はメトロポリ

タン美術館でモネやゴッホなどの名画をたくさん観てきていた。どの作品も一人の作家の作品であった。そもそも二人で製作する作品はあり得るのかという質問であった。二人とも今回は挑戦的な取り組みとして実施したが面白い作品が出来上がったと肯定的な回答をしてくれた。コラボレートされた作品については今後どのように発展されてゆくのか興味深い。

会場を多くの方々が訪れてくださった。特にフライアン氏のお母様はデトロイトで広告関係の現職のデザイナーであり、熱心にワークショップに取り組み、ギャラリートークでもこれから真剣に書道に取り組むとの意思表示を行われたのは嬉しかった。

ニューヨークではミュージカルを見ようとライオンキングのチケットを手配していた。日本では手配できなかったチケットがニューヨークでは手配できた。劇団四季の公演は観ていたし、最近公開された映画版も日本で鑑賞していた。しかし、ブロードウェイで見るライオンキングは格別であり、広い会場が連日満員の観客で埋まる状況は圧巻であった。公演後、町は深夜であるにも関わらず人が溢れて不夜城の様相を呈していた。その活気を見ると、日本は最近インバウンドで来日客が急増しているが夜のエンターテインメントが十分でないと感じた。

帰国を前にボストンに立ち寄った。ハーバード大学とボストン美術館を見学したが日本と比べて、歴史は浅いが財力に裏打ちされて施設の的にも作品的にも充実していると実感した。関西は日本の文化財を多数保有しているが外国人を満足させるためにはさらにお金をかけ充実してゆく必要があると感じた。